谷内三郎事務局長のこと

和　田　明　子

大月駅で富士急行にのって30分，三ツ峠駅下車２分のところに事務局をかまえる西桂織物工業協同組合は，伝統的な織物生産を守りながら，新製品開発など織物産地の活路開拓に，意欲的なとりくみを進めている。この活動を西桂織協の事務室でばっしりと支えているのが，谷内三郎事務局長である。

谷内事務局長自身の話によると，氏は東京電力を定年退職されたあとにこのポストをえられたという。70才をいくつかまわったかにみうける活力あふれる事務局長は，西桂織協を訪ねるたびに，私たちを快くむかえてくださる。私が内藤博夫（お茶大），青野寿彦（中央大），小金沢孝昭（宮城教育大）先生がたと西桂町の地域調査をはじめてから，もう７・８年を数える。この間に郡内機業地は，２回にわたる過剰織機の廃棄処分がおこなわれ，産地は盛時の２分の１までに縮小した。この織機の廃棄という大事業を一手に引き受けられ，織協組合員の立場にたって事務処理をされたのが，谷内事務局長である。谷内氏の精力的な仕事ぶりは，郡内産地の他の織物組合にはみられない，西桂織協の統計資料の作製と保存によって証明されるところである。まさに，谷内事務局長あっての西桂織物産地の存続といえよう。とりわけ私たち研究者グループは，そのご努力の恩典にあづかり，蓄積された資料の分析を通して，現在の日本の絹人繊織物業地域が，どういう状況にあるのか，その実態を把握することができた。

ところで，この谷内三郎事務局長は，都留文科大の地理ゼミ生のあいだで，大いに人気を博している（都留市の）隣町の小父さんである。昨年の三月のこと，卒業式を間近にひかえたある女子学生が，「都留で学んだ記念に，先生がいつも話してくださる西桂織協の谷内事務局長さんにおあいして，ネクタイやスカーフを買いたい」と私に話をもちかけてきた。そこで早速，愛車を駆って西桂織協へ。いつも内藤・青野先生など男性ばかりと織協を訪ねている私が，その日は見目うるわしい女子学生をともなっての訪問に，すっかり気をよくしてくださった事務局長は，話の趣旨をききとるやいなや，すっくと隣室に姿を消した。そして何か赤い小さなものを掌にもってこられたと思ったとたん「恋を語るわけではないけれど……これをどうぞ」と彼女に素敵なスカーフをプレゼント。そのしぐさは，まったく歌舞伎役者そのものであった。そして，いつものように，ゴルバチョフのペレストロイカや，ポーランドの政治改革をいっとき談じたあと，彼女の希望におうじて，組合理事長の工場でネクタイが購入できるよう，その案内役をかってくださった。

一方事務局長は，私に対しても「先生や，内藤・青野・小金沢先生にあえて本当によかったよ。大学の先生たちとこんなに親しくなれてわたしは，実に幸せさ！」とおっしゃるかとおもうと，今度は「先生よナァー，男には気をつけろよ！！　退職金をねらう男もいるからナ！　退職金をもらったら，それはしっかり持っていないといけんヨ！！」などと注意してくださる。これはなかなか他の人から聞くことができない，ありがたい忠告である。

まことに率直で明るく，つねにジョークにみち，おいくつになってもチャーミングな谷内三郎事務局長。どうぞ，ますますお元気で活躍されますよう！そして，この紙面をおかりして西桂織協のより一層の発展を心から祈念して，私の拙文を西桂織協の大黒柱・谷内三郎事務局長にささげるしだいである。

（都留文科大学）